

# 鹿児島における子どもの生活実態と社会階層

神 田 嘉 延

(1981年10月18日 受理)

## Life Status of Children and Social Class in Kagoshima

Yoshinobu KANDA

### 目 次

はじめに

- 1 子どもの日常生活習慣と社会階層
- 2 子どもの生活時間・リズムと社会階層
- 3 子どもの生活にみる親子関係と社会階層
- 4 子どもの生活での家族の位置と社会階層

### はじめに

本稿は、鹿児島子ども研究センターが、1980年6月に実施した「鹿児島の子どもと親の生活と意識」調査の分析結果の一部として、子どもの生活実態と社会階層をのべたものである。すでに、1981年5月に、研究センターとして、調査報告書（第1次）が発表されている。この報告書において、「調査の方法と対象」を明らかにしている。調査票は母と子どもがセットになっており、調査対象数は、小学5年、中学1年、中学3年と3学年にわたり、地域は、商業地区、旧住宅、新興住宅、近郊農村と4地域を選び、1地域1学年200になるように調査を行なっている。4地域の総計は、2351組である。（各地域、各学年、男女の数については、第1次報告書を参照。）

父母の職業分布、年令、学歴構成、母親の雇用状況、家族構成、子どもの数の分布、調査対象児の兄弟姉妹の位置、所得分布の全体の状況についてと4つの地域の特性は、第1次報告書でのべられている。

ところで、4地域に対応させての子どもの生活実態については、時系列的に(1)登校前の朝の生活、(2)下校・帰宅後の夕食までの生活、(3)夕食から就寝までの夜の生活とそれぞれ特徴を第1次報告書で明らかにした。

本稿では、地域特性から、さらに、進めて、職業階層、母親の雇用状況、所得階層についてのクロス分析を行なった。子どもの生活実態を社会環境の中でとらえるために子どもの家庭状況をみていく基礎作業のためである。子どもの生活は、親の生活に大きく影響されていくが、それは、家庭状況の具体的な問題の中で現われてくるものである。子どもの発達保障にとって、社会的、家庭的な問題（社会的貧困の現象の把握必要）が大きな疎外要因になっているのである。「社会の底辺層

に対する補償教育 (Compensation Education) の問題は、教育の機会均等の教育計画にとって、もっとも基本的なものである。なぜなら、社会的家庭的条件が劣っているものは、教育においてももっとも不利な条件を負っているからである。』<sup>註(1)</sup>

本調査研究は、アンケートの解答によって統計処理したものであり、個々の家庭の具体的事例と子どもの生活実態を問題にしているわけではなく、あくまでも、それぞれの社会階層のもつ一般的傾向であり、子ども自身の具体的成長を保障していくための実態は、個々の事例に即して、面接調査を深めていかねばならない。面接調査を行なうにあたって子ども自身の発達と社会環境の体系的な理論仮説が求められる。体系的仮説なくして、具体的に問題をみつめていくことができないからである。一般的傾向把握、具体的面接作業、観察、実践事例分析、理論の深化のくりかえしで研究過程が進んでいくのである。従って、本調査研究は、それらの研究のための予備的作業としての一般的な傾向把握にすぎない。

ところで、1980年の国際児童年事業として二つの立場の異なる大きな機関が子ども実態調査を実施した。それは、日教組、国民教育研究所「子ども生活環境調査」と総理府青少年対策本部「国際比較日本の子供と母親」である。<sup>註(2)</sup>

総理府の調査では、10才から15才以下を対象にしており、その調査内容は、児童の就学状況、生活実態、児童の価値感・生活感、児童の人間関係、職業志望、などの児童側のものと、母親の子供のしつけ、子との人間関係、母親の社会観・人間観、等々多面的にわたっている。その中で児童の生活実態の調査の項では、就寝、起床時間、睡眠時間、学校での拘束時間、学校以外での勉強時間、遊んでいる時間、自由な時間の過ごし方、手伝い時間及び手伝い内容などを、わが国とフランス、韓国、タイ、イギリス、アメリカと国際比較している。

調査数は、各国とも、母子1,500組を原則として行なっている。

この調査結果より日本の子どもは、「勉強」を生活の中心に据えているとしている。「10才では、『勉強』がそれほどの重圧とはなっていないため、長時間にわたって遊んでおり、手伝いもしているが、15才では『勉強』がかなり重圧となり、睡眠時間を割き、遊んでいる時間を割いて、その分勉強時間にまわしている」<sup>註(3)</sup>

日教組の「生活・環境調査」では、子どもの生活リズムの乱れを問題にしている。「朝自分で起きれるか」「排便のリズムはどうか」「起床時の様子と学習意欲タイプ」などの調査を行なっている。そして、この調査結果の分析をつうじて、5つの提起を行なっている。

- ①早起き、早寝で生活リズムを
- ②からだづくりと生活全体の立て直しを
- ③実生活の体験でテレビ漬けの生活から抜け出す力を
- ④学校を子どもの生きがいに
- ⑤放課後の地域生活をゆたかに

ところで、毎年発行されている日本子どもを守る会編「子ども白書」は、そのときどきの子ども

問題を新聞報道なども詳細に加えながら全体的に据えている。本稿の調査研究の問題意識整理のうえで参考にさせてもらった。<sup>註(4)</sup>

本稿の社会階層なる概念は、社会科学的な階級・階層概念でなく、職業分類、母親の雇用状況分類、所得階層別による機能分類である。また、価値観や社会的威信などによる意識面からの社会階層規定をとっていない。社会階層を機能分類したことは、それが本来的目的でなく、本質的には階級関係をとらえて、その内容の重層的な階層とその構造を明らかにしなければならない。つまり、社会階層と子どもの生活実態を問題にしたことは、国家独占資本主義の蓄積構造における国民生活の実態の中での子どもである。本稿では、この課題は、直接的に対象外にしているが、その考察の展望をもっての社会階層と子どもの生活実態分析である。

注(1) 高山武志「アメリカの貧困児教育」北大教育学部紀要 38号, 75頁

注(2) 総理府青少年対策本部編「国際比較日本の子供と母親——国際児童年記念調査最終報告書」, 日教組, 国民教育研究所「子ども生活環境調査」

注(3) 総理府青少年対策本部, 前掲報告書 49頁

注(4) 日本子どもを守る会編「子ども白書」草土文化

#### その他参考文献

「日本の子ども」(ジュリスト増刊総合特集, 有斐閣, 1979年)

千石保, 飯長喜一郎「日本の小学生——国際比較でみる」日本放送出版協会

有地亭「フランスの親子, 日本の親子」日本放送出版協会

岩波講座子どもの発達と教育第1巻「子どもの発達と現代社会」岩波書店

NHK放送世論調査所「日本の子どもたち」1980・5

Philip Robinson "Education and Poverty" Methuen

### 1. 子どもの日常生活習慣と社会階層

本項では、子どもの日常生活習慣的行動の自立性を社会階層との関係で明らかにするものである。このために、日常生活習慣の項目として、「起床」(子のみ)「洗顔」(母子双方)「寝具のかたづけ」(子のみ)「身辺整理」(母子双方)の調査結果の分析を行なった。

「起床」の項目は、朝自分一人で起きれる子どもの実態であり、それは、1日の生活の自然的、生理的リズムの出発という視点から、とくに、この項目については、社会階層とのクロス分析だけでなく、子どもの精神的自立性の項目や生活時間の項目とのクロス分析を行なった。

「身辺整理」の項目は、母子双方からの解答のズレの問題も同時に明らかにした。子どもの生活の自立にとって、自分の部屋の掃除をしたり、机のまわりをかたづけたりするという身のまわりの整理が出来ることは、基本的な生活習慣である。生活習慣上の自分のことは、自分ですするという生活の自立性の分析は、本項の基本課題でもある。

## 1) 「起床」

朝起こされる子どもは、表(1)に示すように、職業別において、公務員の家庭が、相対的に高い。とくに、公務員の場合は、学年が上がるにつれて起こされる子どもが多くなっている。表(2)に示すように母親の雇用状況では、働いていない母親をもつ女の子が最も起こされる率が高い。学年が上がるにつれて、その差は著しく開いていく。例えば、中学3女子の場合、無職が32.5%、自営業が17.6%、雇用者が21.8%と大きく開いている。表(3)に示すように子どもの家庭の所得分布についての相関は、階層的に現われていない。

朝起こされる子どもは、勉強時間、就寝時間、登校までの朝の時間がどのようになっているのかということ、それらとのクロス分析を行なった。

表(1) 朝起こされる子どもの家庭の職業 %

	農 林	商業・サービス	技能労働者	一般事務	公務員
小学5	29.6	23.8	28.0	23.6	22.4
中学1	20.0	25.6	36.2	27.5	35.6
中学3	23.8	23.2	21.7	26.5	36.4

表(2) 朝起こされる子どもの母親の雇用状況 %

	自 営 業		雇 用 者		無 職	
	男 子	女 子	男 子	女 子	男 子	女 子
小学5	19.1	26.5	28.6	22.0	22.6	28.1
中学1	25.3	27.7	30.3	33.3	27.4	35.9
中学3	28.9	17.6	26.4	21.8	26.5	32.5

表(3) 朝起こされる子どもの家庭の所得分布 %

	250万以下	250~350万	350~450万	450~600万	600万以上
小学5	26.4	29.1	20.5	21.3	26.3
中学1	25.3	30.5	32.4	27.6	25.7
中学3	26.9	23.7	27.7	32.7	27.6

表(4)に示すように、勉強をしない子どもは、起こされる率が少なく、よく勉強する子どもは、起こされる率が高い。この傾向が顕著になるのは、中学3年である。表(5)に示すように、就寝時間と起こされる子どもの関係においても、11時、12時と遅く眠る子どもは、朝起こされる子どもになっている。表(6)に示すように、起こされる子どもは、学校に出かけるまでの時間もきわめて少ない。それらの子どもは、20分以下、20分~40分以下に集中している。学年が上がるにつれて、その傾向は強くなっていく。しかしながら、登校前の時間が20分以下しかない子どもの中で、自分ひとりで起きる子どもは、3割~4割存在しているのである。中学3年の場合、登校前の時間20分以下の子どもで「起こされる子ども」は24.8%であるが、ひとりで起きる子どもは、

表(4) 勉強時間ごとのひとりで起きる, 起こされるの比率 %

		あまりしない	1時間以下	2時間以下	3時間以下	3時間以上
小学 5	ひとりで起きる	31.6	29.7	34.9	32.6	35.0
	起こされる	26.3	24.1	22.1	32.6	<b>35.0</b>
中学 1	ひとりで起きる	25.0	31.1	28.1	34.5	32.9
	起こされる	31.3	<b>37.8</b>	24.3	29.4	29.4
中学 3	ひとりで起きる	39.5	41.6	40.6	31.8	33.3
	起こされる	17.3	18.2	22.1	<b>31.1</b>	<b>30.0</b>

註. 各学年のその他の項%省略

表(5) 就寝時間ごとのひとりで起きる, 起こされるの比率 %

		9時以前	9~10時	10~11時	11~12時	12時以後
小学 5	ひとりで起きる	<b>49.1</b>	<b>33.7</b>	31.8	18.4	—
	起こされる	22.6	18.5	29.0	38.8	—
中学 1	ひとりで起きる	—	42.3	33.4	28.1	22.2
	起こされる	—	17.9	23.9	<b>33.4</b>	<b>34.6</b>
中学 3	ひとりで起きる	—	50.0	43.1	34.2	29.3
	起こされる	—	24.0	17.8	26.8	<b>31.2</b>

註. 各学年のその他の項の%省略

表(6) 登校までの朝の時間ごとのひとりで起きる, 起こされるの比率 %

		20分以下	20~40分	40~60分	60分以上
小学 5	ひとりで起きる	39.9	31.2	23.8	<b>44.1</b>
	起こされる	21.6	23.8	29.3	21.5
中学 1	ひとりで起きる	32.8	29.8	30.8	<b>39.8</b>
	起こされる	30.5	30.6	26.5	19.4
中学 3	ひとりで起きる	40.1	27.7	37.4	<b>53.8</b>
	起こされる	24.8	30.5	22.5	19.3

註. 各学年のその他の項の%省略

40.1%となっている。就寝時間が12時以降でもひとりで起きれる子どもは、中学3年の場合、29.3%であり、起こされる子どもは、31.2%である。勉強時間についても、中学3年の場合は、3時間以上勉強する子どものひとりで起きる率は、33.3%であり、起こされる率は、30.0%とそれほど大差がない。つまり、これらの事実は、勉強時間の長さ、就寝時間の遅さ、登校までの時間の短かさが、かならずしも、起こされる子どもという意味でなく、あくまでも相対的に、自分ひとりで起きれる子どもの率が低いということを示しているのである。就寝時間が遅い、勉強時間が長い、登校までの時間が短い条件のもとで、自分ひとりで起きている子どもが多いことは、起こさ

れる子どもには、他の要因が絡んでいるのである。

朝起こされる子どもは、洗顔、寝具のかたづけ、勉強時間、自分の部屋の掃除などの身辺整理が、どのようになっているのだろうか。表(7)に示すように、洗顔はみがきなどの身体的な生活習慣については、朝起こされる子どもが、とくに、他の子どもに比して、とくに出来ていないという状況はなく、すべての学年についても全体の項目と同率を示している。勉強時間を決めていることについても起こされる子どもは、中学3年になると全体より高くなっている。これに反して小学5年の場合、起こされる子どもの勉強時間をきめている率は、逆に、全体より低くなっている。

寝具のかたづけや、自分の部屋の掃除などの身辺整理について、起こされる子どもは、全体に比して、著しく、出来ていない。つまり、自分の生活上の身辺整理について親に依存していることがいえるのである。

表(8)に示すように、「自分の気持ちをはっきりいえる」「人に迷惑なことはがまんする」「きれいな食べ物でもたべる」という精神的自立の状況は、全体として学年が上がるにつれて、できる子どもが少なくなっている。なかでも「きれいな食べ物でもたべる」子どもの比率は、極端に減少している。その三項目ともひとりで起きれる子どもの方が相対的に出来ることを示している。

表(7) 起こされる子どもの生活習慣確立状況

%

	小学5	中学1	中学3
洗 顔	66.3 (62.0)	76.4 (75.5)	85.5 (85.5)
ふとんのしまつ	28.7 (34.6)	27.9 (34.4)	35.6 (44.5)
勉強時間を決めている	19.9 (27.9)	40.3 (37.5)	27.9 (23.6)
部 屋 の 掃 除	27.6 (34.2)	34.3 (42.2)	44.7 (50.9)

註. ( )内は、全体の子どものいつでもできている項の比率

表(8) 起床の自立性と精神的自立

%

		ひとりで 起きる	起こされる	全 体
自分の気持ちをはっきりいえる	小学5	48.2	40.3	45.6
	中学1	46.7	41.2	41.0
	中学3	46.7	44.2	41.9
人に迷惑がかからないように がまんする	小学5	56.3	45.3	52.9
	中学1	47.9	48.9	49.4
	中学3	45.3	39.9	42.5
きれいな食べ物もたべる	小学5	58.8	51.9	59.6
	中学1	47.5	39.9	43.2
	中学3	45.0	33.0	38.3

「きれいな食べ物でも食べる」ということは、中学3年の場合、ひとりで起きる子どもと起こされる子どもの差は、12%である。また、学年差でもひとりで起きる子どもでは、小学5年と中学3年の差が13.8%あり、起こされる子どもでは、小学5年と中学3年の差が18.9%と開くのである。

2) 「洗顔」

社会階層によって、毎朝、顔あらい、歯みがきをしている子どもは、同一でない。小学5年の段階において、いつも行なっている子どもは、全体として、62%であったが、農林業40.7%、母親が働きにでている男子41.1%、250万以下所得層55.2%と相対的に身体的自立のできない子どもが多い社会階層が存在する。中学1年になると、いつも行なっている率は、全体的に75.5%と高くなっていくが、これも小学5年と同様に、農林業、母親が働きに出ている男子、250万以下所得層の場合低くなっている。とくに、母親が働きに出ている男子は、60.5%と低くなっている。中学3年になっても、全体的には、85.5%といつもしている子どもの率は著しく高くなるが、農林業66.7%、母親が働きに出ている男子79.2%、250万以下所得層85.0%となっている。洗顔については、各学年とも男女の差が大きく、全般的に女子の方が、できている子どもが著しく高くなっているのである。例えば、母親が働きに出ている子どもについての男女の差をみれば、小学5年の場合、男子41.1%に対して、女子は、74.6%、中学1年の場合、男子の60.5%に対して、女子は、86.2%と大きく男女差を示している。女子は男子に比して、できる子どもの率は高くなっているが、女子のなかでも、母親が働きに出ている場合は低くなっている。ところで、母親が無職の女子は、小学5年85.4%、中学1年90.3%、中学3年97.4%と高率になっている。

表 (9) 「洗顔」をいつもしている子どもの社会階層 %

	母親雇用者の男子	母親雇用者の女子	母親無職の女子	農 林 業	250万以下所得	全 体
小学5	41.1	74.6	85.4	40.7	55.2	62.0
中学1	60.5	79.4	90.3	75.4	67.5	75.5
中学3	79.2	86.2	97.4	79.4	85.0	85.5

3) 「寝具のかたづけ」「身辺整理」

表 (10) に示すように、ふとんやねまきなどを自分でかたづける子どもは、全体的に学年が上がるにつれて比率が高まっていく。小学5年で、いつもしている子どもは、34.6%であるが、中学3年になると44.5%と上昇していく。しかし、社会階層によっては、その傾向は、必ずしも同一でない。

母親が自営している男の子どもは、小学5年の場合、いつもしているが26.6%であるけれども、中学3年になっても26.8%にすぎない。しかし、母親雇用の中学3年女子の場合、54.9%と高い比率を占めており、男女差が著しいことが現われている。小学5年段階において、いつもふとんのしまつや寝まきのかたづけを自分でしている子どもの多い社会階層は、公務員であり、その比率

